Osaka University Knowledge Archive

Title	『東撰和歌六帖』考 : 出典・他出と歌題をめぐって
Author(s)	中村, 友美
Citation	語文. 1999, 73, p. 11-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68952
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『東撰和歌六帖』考

――出典・他出と歌題をめぐって――

中村友美

はじめに

建長四年（一二五二）四月、宗尊親王が第六代将軍として鎌倉幕府に迎えられた。この宗尊親王の和歌師範として、真観がたびたび鎌倉に下向し、また、その他にも大勢の京都の歌人がこの地にやってきた。将軍家を中心として和歌会が催され、宇都宮歌壇においても『新和歌集』が撰集されるなど、この時代、関東歌壇はそれまでにない隆盛をみせていた。『東撰和歌六帖』は、こうした状況下において、幕府の御家人であった後藤基政により、撰集されたとみられている。

『東撰和歌六帖』の、全六帖を有する完本は現在伝わっていない。現存する諸本は、島原図書館松平文庫本・彰考館本・続群書類従本など、歌題目録と第一帖春部の一帖分のみ完存し、三一九首収める系統の本と、祐徳稲荷神社寄託中川文庫本の、抜粋本ながら第一帖から第四帖の途中まで伝え、四九一首収める系統の本とにわかれる。両系統の重出歌を除いた総歌数は七三六首。成立については、『吾妻鏡』弘長元年七月二二日条の「今日、関東近古詠可撰進之由、被仰壱岐前司基政」の記事から弘長元年（一二六一）七月～文永二年（一二六五）九月とみる説と、[1]作者の位署などから正嘉二年（一二五八）七月～正元元年（一二五九）九月とみる説とがある。[2]

『東撰和歌六帖』については、これまで、成立時期の問題や、実朝や宗尊親王などの新出歌を多く含むといった視点以外で論じられることは少なかった。[3]本稿では、出典・他出などの影響関係と、歌題とについて取り上げ、特に歌題については、この時代のひとつの流行であった、六帖題和歌という流れの中で捉えた場合、どのような位置にあるのか明らかにしたい。

一

はじめに、『東撰和歌六帖』の入集歌人と、その歌数を確認しておく。総数一四六名（完本系第一帖で九八名）の歌人名がみられ、一〇首以上入集する歌人は、以下のようになる。

宗尊親王	三九首（二〇首）	源実朝	三八首（二〇首）
北条重時	二六首（一四首）	源親行	二六首（七首）
真昭法師	二五首（一一首）	北条政村	二五首（九首）

素暹法師　二二首（九首）　行念法師　一九首（一〇首）
円勇法師　一九首（八首）　藤原基綱　一六首（七首）
源光行　一六首（五首）　北条長時　一五首（五首）
権律師公朝　一四首（六首）　蓮生法師　一三首（八首）
浄意法師　一三首（五首）　高階家仲　一三首（五首）
二条教定　一二首（八首）　笠間時朝　一二首（四首）
北条泰時　一一首（四首）　藤原能清　一一首（四首）
房円法師　一〇首（五首）　西円法師　一〇首（三首）

※（　）は完本系第一帖の歌数

入集歌数の最も多いのは、撰集を下命したとみられている宗尊親王である。実朝がそれに続き、北条重時・政村・長時・泰時などといった幕府執権の入集が多く、源光行・親行また西円などといった源氏物語の研究に従事した古典学者の詠も多く入集する。万葉集研究で知られる仙覚も六首入集する。全体に、『東撰和歌六帖』の撰集当時の関東歌壇において活躍していた歌人の詠が多いが、現存者に限るわけではなく、実朝や行念といった、既に没している前代歌人も入集させている。真観撰『現存和歌六帖』が、当時「現存」の歌人の詠を集め、故人を含まないのに対し、『東撰和歌六帖』の場合、物故者如何に関わらず、広く関東に縁のある歌人の詠を集めていると考えられる。撰者である基政自身の詠は、八首入集している。

二

『東撰和歌六帖』は、完本が伝存すれば、関東歌人の詠を集めた撰集としては、最大規模であっただろうと考えられている。この関東歌壇最大の撰集は、一体、どのように流布していたのだろうか。ひとまず、『東撰和歌六帖』に収められる歌が、勅撰集にどの程度入集しているのかを確認しておく。表には、完本系第一帖と、抜粋本（完本系第一帖との重出歌を除く）との、それぞれの勅撰集への入集状況を示した。

【勅撰集への入集状況表】

	続古今	続拾遺	新後撰	玉葉	続千載	続後拾	風雅	計
第一帖	一	一	一	二	○	○	一	六
抜粋本	一	三	○	一	一	○	一	七

『続後撰集』以前の勅撰集との共通歌はみられない。実朝や行念などは『新勅撰集』から勅撰集に入集する歌人だが、先行の勅撰集に入集する歌は採られていない。一方、『続古今集』以降の勅撰集にも、完本系第一帖と抜粋本とをあわせても、一三首入集するのみである。このうち二首は実朝の詠である。

①青柳の糸よりつたふ白露を玉と見るまで春雨ぞふる
（完本系第一帖・春部・春雨・一二二・実朝）

②おのがつまこひわびにけり春の野にあさるきぎすのあさなあさな鳴く
（完本系第一帖・春部・雉・二六四・実朝）

一首目は、『続拾遺集』（春歌上・四二）に、詞書を「雨中柳といへる心を」として入集する。この歌は、『金槐和歌集』（四一）にも詞書を「雨中柳」としてみえている。「春雨」の題に収める『東撰和歌六帖』からではなく、『金槐和歌集』を資料として撰歌したものと考えられる。二首目は、『玉葉集』（春歌上・一一三）に入集するが、これも『金槐和歌集』（一〇七）にもみられ、そちらから撰歌したと

考えられる。

宗尊親王や実朝、北条政村、蓮生（宇都宮頼綱）など、『東撰和歌六帖』は、勅撰集に多数入集する歌人の詠を多く収めてはいるが、勅撰集の撰集資料として用いられた形跡は少ない。このような中で、『続拾遺集』への入集歌数が、①の実朝の一首を除いても、抜粋本で三首であり、多少目を引く。『続拾遺集』の撰者である藤原為氏は、蓮生を外祖父とし、『新和歌集』の成立に関与したかともみられている人物である。関東歌壇との関わりが深い撰者が、あるいは、『東撰和歌六帖』を目にすることがあったものであろうか。

三

『東撰和歌六帖』に収められる歌は、他の資料に見出せるものが少なく、ほとんどの歌について出典などは明らかにし難い。『東撰和歌六帖』の撰集以前に成立していた可能性のある家集などで、共通歌がみられるものを以下に示す。

『金槐和歌集』（実朝）　二一首（三八首）
『信生法師集』（信生）　二首（八首）
『寂身法師集』（寂身）　二首（五首）
『珍誉集』（珍誉）　一首（二首）
『百詠和歌』（光行）　一首（一六首）

※（　）の歌数は各歌人の『東撰和歌六帖』への入集歌数

どの歌人についても、『東撰和歌六帖』への入集歌数が、それぞれの家集にみられる歌数を大幅に上回っている。少なくとも、これらの歌人について、『東撰和歌六帖』の撰集資料として利用されたのは、現在残されている家集だけではなかったと考えられる。

このほか、『新和歌集』などに重出する場合、それらの詞書から出典が知られるものもある。「けぶりたつむろの八島のちかければわが住むかたや霞みそむらむ」（『東撰和歌六帖』完本系第一帖・春部・霞・二〇・時朝）の歌は、『新和歌集』（巻第一・春歌・五）にも、「右大弁光俊朝臣鶴岳社にて講じ侍りける十首歌に」という詞書を付して収められている。「山彦の声もかはらず時鳥いづれのかたをわきて詠めん」（『東撰和歌六帖』抜粋本第二帖・夏部・郭公・一〇九・清定）の歌もまた、『新和歌集』（巻第二・夏歌・一〇九）に、「宇都宮神宮寺二十首歌に」という詞書を付して収められる。「光俊講師鶴岳社十首」や「宇都宮神宮寺二十首」は、『新和歌集』の詞書中に数多くみられ、『新和歌集』の撰集資料であったことが知られる。『新和歌集』と同様に、『東撰和歌六帖』でも資料として利用したのであろう。『東撰和歌六帖』と『新和歌集』との間には共通歌が一六首みられ、両者が同じような資料を用いて撰歌したことがうかがわれる。

また、「ちり残るこずゑの花をながむれば春の日数もすくなかりけり」（『東撰和歌六帖』完本系第一帖・春部・暮春・三〇一・時朝）の歌は、『新和歌集』（巻第一・春歌・八三）に「九条内大臣家へ三百六十首歌たてまつりける中に」、『時朝集』（二四）に「京極中納言家へ千首歌を進じける春歌の中に」という詞書を付して、それぞれ収められている。『新和歌集』と『時朝集』とで詞書が異なるが、これは、同じ歌を九条内大臣（基家）と、京極中納言（定家）とへ進じたものであろうか。少なくとも、定家の生前には詠じられていたことがわかる。

『東撰和歌六帖』は、詞書を付さず、他出資料が極端に少ないことから、歌一首一首の詠作事情を知ることは難しい。また、後代の

撰集との間に共通歌が少ないというのは、『東撰和歌六帖』が、あまり流布しなかったことのあらわれとも受け止められる。しかしその一方で、『東撰和歌六帖』は、先行の勅撰集との共通歌を全く含まず、同時期の撰集とみられる『新和歌集』を除いては、他の先行の撰集との共通歌もほとんどみられないのである。『東撰和歌六帖』が、勅撰集などの影響を受けつつも、独自の撰集をめざしたことが、こうした結果にあらわれているのではないだろうか。六帖題和歌という流れの中においても、『東撰和歌六帖』の独自性がみられる歌題について、次節より考察していくこととする。

四

寛元二年（一二四四）、藤原為家・衣笠家良・六条知家・藤原信実・真観の五名が『古今和歌六帖』の歌題を各題一首ずつ詠じ、合点しあった。この『新撰六帖題和歌』での詠作をきっかけとして、六帖題への関心が高まり、建長元年（一二四九）以降には、真観が『現存和歌六帖』を撰集した。これら以外にも、各歌人の家集や勅撰集、私撰集の詞書などから、この時期の歌人に六帖題による詠作の多かったことが指摘されている。[4] 『東撰和歌六帖』も、こうした六帖題の流行を受けて撰集されたと考えられる。しかし、その歌題構成は、『古今和歌六帖』とはかなり異なっている。

『古今和歌六帖』は、歳時・天象・地儀・人事・動植物の分類のもと、第一帖に春・夏・秋・冬・天、第二帖に山・田・野・都・田舎・宅・人・仏事、第三帖に水、第四帖に恋・祝・別、第五帖に雑思・服飾・色・錦綾、第六帖に草・虫・木・鳥の項目を掲げ、各項目ごとに細分化した題を計五一七題たてる。『新撰六帖題和歌』や『現存和歌六帖』でも、歌題については『古今和歌六帖』と同じ構成がとられ、多少出入りはあるものの、どちらも五〇〇題以上有する。これに対し、『東撰和歌六帖』では、全六帖ではあるが、第一帖に春三〇題、第二帖に夏二〇題、第三帖に秋三〇題、第四帖に冬二〇題、第五帖に恋三〇題、第六帖に雑七〇題をあてた、計二〇〇題という構成である。こうした『東撰和歌六帖』の歌題構成の特異性については、早くから指摘があった。[5] だが現在でも、『東撰和歌六帖』が『新撰六帖題和歌』や『現存和歌六帖』の流れを汲む、六帖題形式の類題集であるという見方が一般的である。

『東撰和歌六帖』という書名や、全六帖という点から、『古今和歌六帖』を強く意識した撰集であることは疑いない。しかし、このような整然とした、六帖題とは異なりながら独自の構成を持つ歌題が、はたして六帖題のみに依拠して設定されたものなのであろうか。

『東撰和歌六帖』の歌題が、どの程度六帖題と共通しているのか、まず確認しておく。《表一》に、『東撰和歌六帖』の歌題と、それに相当する六帖題とを一覧にして示した。表から、四季題と雑題とで多くの歌題が、六帖題と一致することが理解される。しかし、例えば春部の歌題で、「立春」は、六帖題においても第一帖の巻頭に配されている歌題であり、「子日」「若菜」「残雪」も共に第一帖の「歳時・春」の項目にみられる歌題だが、「霞」「春月」は、六帖題では第一帖の「天」の項目に分類されている歌題である。以下、「鶯」「喚子鳥」は第六帖の「鳥」の項目に、「梅」「柳」「早蕨」「桜」「桃」「躑躅」「藤」は第六帖の「木」の項目に、「雉」は第二帖の「野」の項目に、「菫菜」「杜若」「款冬」は第六帖の「草」の項目に、「蛙」は第三帖の「水」の項目に分類されている。そもそも、六帖題では、

第六帖の「鳥」の項目に「うぐひす」「よぶこどり」「かり」「しぎ」などを分類する一方、同じく鳥であっても「きじ」「うづら」などは第二帖の「野」の項目に、「う」「ちどり」「みづとり」などは第三帖の「水」の項目に分類するなど、歌題の分類意識が独特である。

このように、『東撰和歌六帖』の歌題の多くが六帖題と一致するとはいえ、六帖題ではさまざまな項目に分散しているのである。また、「早春」「余寒」「春曙」「春駒」「雲雀」「苗代」などは、『新撰六帖題和歌』で追加したと考えられる歌題[6]を考慮しても、六帖題にはみられない歌題である。『東撰和歌六帖』が、六帖題のみに依拠して歌題を設定したとすれば、さまざまな項目にまたがる五〇〇題以上の歌題を取捨選択して再分類し、さらに新たな題を加えたことになる。しかし実際には、六帖題に含まれない歌題の多くは、先行の組題百首の中にみることができる。むしろ、六帖題と共通する歌題についても、原則的には、百首歌などの組題の方に依拠しているのではないかと考えられるのである。

〈表二〉に『東撰和歌六帖』の四季題と、それに対応する『堀河百首』の歌題とを示した。[7]歌題の前に付した数字は、堀河題での配列の順序を示す。堀河題の四季七〇題のうち、夏部の「蓮」「泉」の二題のみ除いた六八題が、すべて『東撰和歌六帖』の四季題の中に採り入れられている。このことから、『東撰和歌六帖』の四季題が、堀河題を基本にしていることは、まず間違いないと考えられる。堀河題は、六帖題などの影響も受けながら設定されたとみられている。[8]『東撰和歌六帖』の歌題が、六帖題に多く一致するのは、六帖題に影響を受けた歌題をそのまま採用したためであって、直接的に、六帖題に依ったわけではないとみてよいのではないだろうか。

歌題配列についても、天象・植物・動物・行事題を、時節の推移によって並べる堀河題の配列に、大きな流れとしては、倣っている。堀河題と、『東撰和歌六帖』との歌題配列に、異同がある箇所としては、まず、堀河題では「立春」につづく二番目の歌題である「子日」が、五番目に置かれる点があげられる。「子日」は、『東撰和歌六帖』では、「立春」「早春」「霞」「鶯」の後に配列されている。「子日」の後には「若菜」が続く。勅撰集などの主題配列をみても、堀河題のように、早春の景物として、「子日」が「霞」などよりも前に置かれた例は少ない。[9]また、「若菜」と並べて配列することが通例であるので、[10]配列を変更したのであろう。堀河題を原則としながら、勅撰集などの配列を考慮し、配列の修正を行っていると考えられる。

『堀河百首』以外では、〈表二〉にあわせて示したが、春部では「余寒」「春曙」「雲雀」「桃」「雉」「蛙」「躑躅」など、『永久百首』や『六百番歌合』の歌題を参照していると考えられる。『堀河百首』・『永久百首』・『六百番歌合』のいずれにもみられない歌題は、「早春」「春月」「暮春」「神祭」「夏月」「納涼」「初秋」「浅茅」「鴨頭草」「冬月」の一〇題である。このうち、「春月」「夏月」「冬月」の三題は、『新古今集』の頃から確立してきた歌題であり、『宝治百首』の組題に立てられて以来、以降の応制百首にもみられる。[11]「納涼」もまた、『弘長百首』以降の応制百首にみられる。これらの歌題と共に、『永久百首』や『六百番歌合』の歌題である「夏草」「夕立」「秋夕」「落葉」なども、『宝治百首』以降の応制百首に繰り返しみられ、中世的な歌題と考えられる。[12]また、こうした歌題は、『東撰和歌六帖』の撰集を下命したとされる、宗尊親王の百首歌などにも数多くみられる。

恋三〇題	
初恋	
忍恋	
聞恋	
見恋	
尋恋	
祈恋	
不遇恋	
契恋	
頼恋	
待恋	
遇恋	
後朝恋	
増恋	
切恋	
顕恋	
旅恋	
遠恋	
近恋	
片恋	四恋・かたこひ
変恋	
稀恋	
別恋	
怨恋	四恋・うらみ
絶恋	
旧恋	
暁恋	
朝恋	
昼恋	
夕恋	
夜恋	
雑七〇題	
天	一天・あまのはら
日	一天・てる日
月	一天・はるの月 ～ゆふやみ
星	一天・ほし
風	一天・はるのかぜ ～ざふのかぜ
雲	一天・くも
雨	一天・あめ
火	一天・ひ
煙	一天・けぶり
山	二山・やま
杣	二山・そま
岡	二山・をか
野	二野・はるのの ～ざふのの
原	二山・はら
杜	二山・もり
水	三水・みづ
沢	三水・さは
池	三水・いけ
滝	三水・たき
河	三水・かは
湖	

海	三水・うみ
湊	三水・みなと
江	三水・え
都	二都・みやこ
村	
里	二田舎・さと
故郷	二田舎・ふるさと
山家	
田家	
路	二山・みち
関	二山・せき
橋	三水・はし
草	六草・はるの草 ～ざふの草
木	六木・き
竹	六木・たけ
鳥	六鳥・とり
獣	
魚	三水・いを
樵夫	
海人	三水・あま
祝	四祝・いはひ
別離	四別・わかれ
旅	四別・たび
眺望	
述懐	
懐旧	
夢	四恋・ゆめ
無常	
玉	五服飾・たま
鏡	五服飾・かがみ
錦	五錦綾・にしき
糸	五錦綾・いと
衣	五服飾・ころも
布	五錦綾・ぬの
枕	五服飾・まくら
莚	二宅・むしろ
笛	五服飾・ふえ
琴	五服飾・こと
墨	
筆	
剣	五服飾・たち
弓	五服飾・ゆみ
舟	三水・ふね
筏	
物名	
社	二山・やしろ
神祇	
寺	二仏事・てら
釈教	

※『古今和歌六帖』の歌題で，「一歳時」は「第一帖歳時部」であることを示す

※〔　〕は『新撰六帖題和歌』で追加された歌題を示す

≪表一≫　東撰和歌六帖題と六帖題との比較

東撰六帖	古今六帖
春三〇題	
立春	一歳時・はるたつ日
早春	
霞	一天・かすみ
鶯	六鳥・うぐひす
子日	一歳時・ねのび
若菜	一歳時・わかな
余寒	
残雪	一歳時・のこりのゆき
梅	六木・むめ
春月	一天・はるの月
春曙	
帰雁	〔六・かへるかり〕
春雨	〔一・はるさめ〕
柳	六木・やなぎ
早蕨	六草・わらび
春駒	
雲雀	
桜	六木・さくら
桃	六木・もも
喚子鳥	六鳥・よぶこどり
雉	二野・きじ
菫菜	六草・すみれ
苗代	
杜若	六草・かきつばた
款冬	六草・山ぶき
蛙	三水・かはづ
躑躅	六木・つつじ
藤	六木・ふじ
暮春	一歳時・はるのはて
三月尽	
夏二〇題	
更衣	一歳時・ころもがえ
神祭	一歳時・神まつり
卯花	一歳時・うのはな
葵	六草・あふひ
郭公	六鳥・ほととぎす
橘	六木・たち花
早苗	
菖蒲	一歳時・あやめ草
五月雨	〔一・さみだれ〕
照射	二野・ともし
鵜	三水・う
蚊遣火	
夏草	六草・夏の草
瞿麦	六草・なでしこ
夏月	一天・夏の月
夕立	一天・ゆふだち
蛍	六虫・ほたる
氷室	〔一・氷むろ〕
納涼	
夏祓	一歳時・なごしのはらへ

秋三〇題	
立秋	一歳時・あきたつ日
初秋	一歳時・はつあき
七夕	一歳時・たなばた
荻	六草・をぎ
萩	六草・秋はぎ
女郎花	六草・をみなえし
薄	六草・すすき
刈萱	六草・かるかや
浅茅	六草・あさぢ
蘭	六草・らに
鴨頭草	六草・つき草
槿	六草・あさがほ
秋夕	〔一・秋の夕〕
露	一天・つゆ
虫	六虫・むし
鹿	二山・しか
雁	六鳥・かり
月	一歳時・秋の月
駒迎	一歳時・こまひき
野分	
擣衣	五服飾・ころもうつ
霧	一天・きり
稲妻	一天・いなづま
秋田	二田・あきのた
鴫	六鳥・しぎ
鶉	二野・うづら
菊	六草・きく
紅葉	六木・もみぢ
暮秋	一歳時・あきのはて
九月尽	
冬二〇題	
初冬	一歳時・はつふゆ
時雨	一天・しぐれ
落葉	
霜	一天・しも
枯野	
寒蘆	
冬月	一天・冬の月
千鳥	三水・ちどり
水鳥	三水・みづとり
氷	一天・こほり
網代	三水・あじろ
霰	一天・あられ
霙	
鷹狩	二野・大たかがり こたかがり
雪	一天・ゆき
神楽	一歳時・かぐら
炭竈	二山・すみがま
埋火	
仏名	一歳時・仏名
歳暮	一歳時・としのくれ

≪表二≫　四季部歌題一覧

東撰六帖	堀河百首	永久百首	六百番歌合
春三〇題	春二〇題	春一八題	春一五題
立春	1・立春		
早春			
霞	3・霞		
鶯	4・鶯		
子日	2・子日		
若菜	5・若菜		
余寒		2・余寒	2・余寒
残雪	6・残雪		
梅	7・梅		
春月			
春曙		4・春曙	10・春曙
帰雁	13・帰雁		
春雨	11・春雨		
柳	8・柳		
早蕨	9・早蕨		
春駒	12・春駒		
雲雀			8・雲雀
桜	10・桜		
桃		13・桃	
喚子鳥	14・喚子鳥		
雉		16・雉	7・雉
菫菜	16・菫菜		
苗代	15・苗代		
杜若	17・杜若		
款冬	19・款冬		
蛙		18・蛙	14・蛙
躑躅		15・躑躅	
藤	18・藤		
暮春			
三月尽	20・三月尽		
夏二〇題	夏一五題	夏一二題	夏一〇題
更衣	1・更衣		
神祭			
卯花	2・卯花		
葵	3・葵		
郭公	4・郭公		
盧橘	9・盧橘		
早苗	6・早苗		
菖蒲	5・菖蒲		
五月雨	8・五月雨		
照射	7・照射		
鵜		9・鵜川	3・鵜河
蚊遣火	11・蚊遣火		
夏草		3・夏草	2・夏草
瞿麦		4・瞿麦	
夏月			
夕立		(秋2・晩立)	9・晩立
蛍	10・蛍		
氷室	13・氷室		
納涼			
夏祓	15・荒和祓		

秋三〇題	秋二〇題	秋一八題	秋一五題
立秋	1・立秋		
初秋			
七夕	2・七夕		
荻	8・荻		
萩	3・萩		
女郎花	4・女郎花		
薄	5・薄		
刈萱	6・刈萱		
浅茅			
蘭	7・蘭		
鴨頭草			
槿	13・槿		
秋夕			7・秋夕
露	11・露		
虫	17・虫		
鹿	10・鹿		
雁	9・雁		
月	15・月		
駒迎	14・駒迎		
野分			5・野分
擣衣	16・擣衣		
霧	12・霧		
稲妻		10・稲妻	3・稲妻
秋田			8・秋田
鴫			9・鴫
鶉			4・鶉
菊	18・菊		
紅葉	19・紅葉		
暮秋			15・暮秋
九月尽	20・九月尽		
冬二〇題	冬一五題	冬一二題	冬一〇題
初冬	1・初冬		
時雨	2・時雨		
落葉		4・落葉	1・落葉
霜	3・霜		
枯野			3・枯野
寒蘆	6・寒蘆		
冬月			
千鳥	7・千鳥		
水鳥	9・水鳥		
氷	8・氷		
網代	10・網代		
霰	4・霰		
霙		1・霙	4・霙
鷹狩	12・鷹狩		
雪	5・雪		
神楽	11・神楽		
炭竈	13・炭竈		
埋火	14・埋火		
仏名		11・仏名	10・仏名
歳暮	15・歳暮		

この他、「早春」や「暮春」などは、特に目新しい歌題ではないが、類似の歌題である、「立春」や「三月尽」と並んで設題されている点が留意される。組題では、どちらかの歌題のみ立てられることが多いが、これらはどちらも『和漢朗詠集』にみえる題であり、『和漢朗詠集』でも『東撰和歌六帖』と同様に、「立春」や「三月尽」と並んでいる。

【和漢朗詠集・春部】立春 早春 春興 春夜 子日付若菜 三月三日 暮春 三月尽 閏三月 鶯 霞 雨 梅付紅梅 柳花付落花 躑躅 藤 款冬

『東撰和歌六帖』の四季題は、まず、堀河題を原則に据え、『永久百首』や『六百番歌合』の歌題、さらには中世の応制百首などにみられる歌題を加え、構成を整えていったのではないだろうか。

恋題については、四季題に比べ、歌題の定着が遅れたと言われており、[13]『堀河百首』でも、一〇題が立てられているにすぎなかったが、その後細分化が進み、『六百番歌合』では、五〇題という大規模な恋題が設定されるに至った。『六百番歌合』の恋題は、前半二五題が「―恋」の題で、恋の進行・時間・場所などによって配列され、後半二五題が「寄―恋」の寄物題となる。『東撰和歌六帖』の恋三〇題は、この『六百番歌合』の恋題の前半部をもとに構成しているとみられる。〈表三〉には、『東撰和歌六帖』の恋題と、それに対応する『六百番歌合』の恋題とを示した。

『六百番歌合』の前半二五題のうち、『東撰和歌六帖』で除かれるのは「老恋」「幼恋」の二題のみである。配列についても、ほぼ『六百番歌合』に一致し、まず、恋の進行によって「初恋」から「旧恋」までを配列し、末尾に、「暁恋」から「夜恋」という時間による恋の歌題を、ひとまとまりに配列する。大きな異同としては、『六百番歌合』では末尾に置かれている、「遠恋」「近恋」「旅恋」の場所などを示す恋の三題が、「顕恋」と「片恋」との間という、恋の進行によっ

≪表三≫　恋部歌題一覧

東撰六帖	堀河百首	六百番歌合
恋三〇題	恋一〇題	恋五〇題
初恋	1・初恋	1・初恋
忍恋		2・忍恋
聞恋		3・聞恋
見恋		4・見恋
尋恋		5・尋恋
祈恋		6・祈恋
不遇恋	3・不遇恋	
契恋		7・契恋
頼恋		
待恋		8・待恋
遇恋		9・遇恋
後朝恋	5・後朝恋	
増恋		
切恋		
顕恋		11・顕恋
旅恋	7・旅恋	25・旅恋
遠恋		23・遠恋
近恋		24・近恋
片恋	9・片恋	
変恋		
稀恋		12・稀恋
別恋		10・別恋
怨恋	10・恨	14・怨恋
絶恋		13・絶恋
旧恋		15・旧恋
暁恋		16・暁恋
朝恋		17・朝恋
昼恋		18・昼恋
夕恋		19・夕恋
夜恋		20・夜恋

て配列がなされている箇所に置かれていることがあげられる。これは、この三題を、恋の進行過程のなかでその様相をあらわす歌題として捉え直し、配列を変更したものであろう。

『六百番歌合』の歌題に含まれないものとしては、「不遇恋」「頼恋」「後朝恋」「増恋」「切恋」「片恋」「変恋」の七題があるが、「不遇恋」「後朝恋」「片恋」の三題は、堀河題にみられる。その三題以外では、「増恋」が、元仁二年（一二二五）の『基家家三十首』、「変恋」が、建保五年（一二一七）の『四十番歌合』で出題されていることが確認できる。「切恋」は、家隆の家集『壬二集』に収められる、「家百首」の歌題のなかに確認できる。

恋題についても四季題と同様に、まず『六百番歌合』を原則に据え、堀河題などから歌題を補い、その一方で、新しい歌題を採り込んで、構成していったものと考えられる。

雑題については、〈表一〉に示したように、七〇題という膨大な数を有し、そのうち五四題までが六帖題に一致する。しかし、これもまた、「天・日・月・星・風・雲・雨・火・煙・山・杣・岡・野・原・杜……」という配列からすれば、六帖題をそのまま用いたというよりは、類書や、その影響を受けた歌学書などの分類項目の影響を受け、修正を加えていったのではないかと考えられる。参考に『八雲御抄』巻三枝葉部の天象部の項目をあげておく。[14]

【八雲御抄・天象部】天　日　月　星　風　嵐　雨　雲　霞　霧　露　霜　雪　霰　煙　雷　晴

「霞」以下「霰」までは、既に、『東撰和歌六帖』の四季題に歌題として立てられているので、そうした項目を除いていけば、両者がかなり近い関係にあることが理解されるであろう。歌学書類の項目にはあまりみられない『東撰和歌六帖』の雑題としては、「山家」「田家」「眺望」「述懐」「懐旧」「無常」「物名」「神祇」「釈教」などがあげられる。これらは、六帖題の中にもみられない。しかし、堀河題や応制百首などの組題では、雑部の歌題として立てられていることが多く、それらを採り入れたと考えられる。

『東撰和歌六帖』という書名は、『古今和歌六帖』につながる撰集である、ということを示している。しかし、その歌題配列は、『古今和歌六帖』そのものにのみ倣ったのではない。直接には、四季題は、組題の典型とされる堀河題に依り、『永久百首』・『六百番歌合』などの歌題で補い、恋題は、非常に細分化された恋題を持つ『六百番歌合』に依っている。雑題は、歌学書などの分類項目の影響を受け、膨大な数の歌題を立てたとみられる。その中に、中世和歌において確立していった歌題をも積極的に採り込んで、整然とした四季・恋・雑の部類を持つ、二〇〇題という歌題が立てられた。『東撰和歌六帖』の歌題は、このようにして、堀河題や、他の組題などの修正を受けながらつくり出された、新しい「六帖題」だったのではないだろうか。

おわりに

『東撰和歌六帖』の、出典・他出などを可能な範囲で示し、歌題について、六帖題と共に、先行する組題との関係から考察してきた。

『新撰六帖題和歌』を主催した藤原為家や、『現存和歌六帖』を撰集した真観は、両者とも関東歌壇とのつながりが深かった。彼らが六帖題に注目するようになったのは、その歌題の豊富さ、おもしろさからであり、新しさを求めてのことであった。そして実際それら

の撰集には、上代を指向し、新奇さを狙った歌が多くみられる。これに対し、『東撰和歌六帖』にはそのような傾向はあまりみられず、どちらかといえば平明な歌を多く収めている。今回、主に歌題について考察し、和歌そのものについてはふれることがなかったが、今後、これらのことを含め、検討していきたい。

注

(1) 濱口博章氏「鎌倉歌壇の歴史と業績」(『甲南大学文学論集』一　昭和二九年一月)など。

(2) 石田吉貞氏「宇都宮歌壇とその性格」、「鎌倉文学圏」(『国語と国文学』昭和二二年二月、昭和二九年一〇月。『新古今世界と中世文学』北沢図書出版　昭和四七年一一月所収)。樋口芳麻呂氏「宗尊親王初学期の和歌――東撰和歌六帖所載歌を中心に――」(『国語国文学報』第一二集　昭和四四年三月)など。中川博夫氏「『東撰和歌六帖』成立時期小考」(『中世の文学』附録一四　平成元年六月)では、『新和歌集』との関係から成立の上限を正嘉元年一一月とする。

(3) 実朝の新出歌を多く収載する点では古くから注目されており、近年でも、犬井善壽氏「『東撰和歌六帖』所載実朝歌の本文の吟味から」(『日本古典文学の諸相』勉誠社　平成九年一月)において『金槐和歌集』諸本の本文との検討がなされている。

(4) 佐藤恒雄氏「新撰六帖題和歌の成立について」(『香川大学教育学部研究報告』第四九号　昭和五五年三月)。宗尊親王や後嵯峨院にも、六帖題による大規模な詠作のあったことが知られている。小川剛生氏「宗尊親王和歌の一特質――「六帖題和歌」の漢詩文摂取をめぐって――」(『和歌文学研究』第六八号　平成六年五月)、池尾和也氏「「六帖題和歌」の周辺(中)――「後嵯峨院六帖題三百首」について――」(『中京国文学』第一四号　平成七年三月)。

(5) 山岸徳平氏(『校註国歌大系』「古今和歌六帖」解題　昭和四年一月)「東撰六帖は六帖と称しても、上述の六帖(稿者注…新撰六帖・現存六帖を示す)と趣を異にして居る。内容を四季恋雑に部類して、立春、早春、霞等の題に従つて歌を集めたものである」など。

(6) 前掲注(4)佐藤恒雄氏論稿。

(7) 『堀河百首』の冬部の最後の二題は異同があり、「炉火」「除夜」とする諸本もあるが、「埋火」とする日本大学総合図書館蔵青谿書屋本・志加須賀文庫蔵本、「歳暮」とする神宮文庫蔵御巫家本などによった。

(8) 橋本不美男氏・滝沢貞夫氏『校本　堀河院御時百首和歌とその研究本文研究篇』(笠間書院　昭和五一年三月)。

(9) ただし、『新古今集』では巻頭から「立春」「若菜」「子日」の順に配列し、「霞」を「鶯」「早蕨」などの後に配列する。

(10) 『拾遺集』では、「若菜」と「子日」との間に「春野」の一首をはさみ、『後拾遺集』「詞花集」「新古今集」「続古今集」などでは、「若菜」と「子日」とを続けて配列する。

(11) 蒲原義明氏「堀河百首題の享受と変質――特に十三代集期の応制百首を中心に――」(『王朝文学　資料と論考』笠間書院　平成四年八月)、深津睦夫氏「組題の世界――新古今以後を中心に――」(『論集〈題〉の和歌空間』笠間書院　平成四年一一月)。

(12) 前掲注(11)論稿。

(13) 松野陽一氏「組題構成意識の確立と継承――白河院期から崇徳院期へ――」(『文学・語学』第七〇号　昭和四九年一月)。佐藤明浩氏「題の拡充と題詠の深化――恋題を中心に院政期から新古今前後まで――」(『論集〈題〉の和歌空間』笠間書院　平成四年一一月)。

(14) 『八雲御抄』と比較した場合、『東撰和歌六帖』の雑題七〇題のうち、五〇題が枝葉部の項目と一致する。

(付記) 本稿における和歌本文・歌番号については、特に断らない限り『新編国歌大観』によった。

――本学大学院博士後期課程――